

概要報告

実施期日	7月28日(火)【午前】
部会名	小学校 家庭部会

テーマ 『家族の一員として、自ら考え実践できる家庭科を目指して』

提案概要

自ら考え実践し、学んだことが家庭生活に生かせるように「考えよう 買い物とくらし」～めざせ！買い物名人～という題材で取り組んだ。家庭で扱う金銭は家族が働くことによって得られた限りあるものであるからこそ、有効に使うとする姿勢をはぐくみたい。本単元では、①買い物についての適切な判断力 ②家庭生活に生かせる家庭科学習 ③他者との交流の3つにポイントをおいて学習を進めた。そのために「家族のためにみそ汁を作ろう」という課題を設定し、児童が意欲的・主体的に取り組むことができる展開を計画した。買い物名人をめざして『その壱：買い物をするときの観点を知る』⇒『その弐：家族の工夫を知り、自分なりの買い物の仕方を考える』⇒『その参：家族のためにみそ汁を作るための買い物の計画・実践』⇒『その四：自分の買い物をふり返る（パンフレット作り）』の4つの段階を設定し、児童の学びがスムーズにつながる展開とした。なお『その参：家族のためにみそ汁づくりのための買い物と実践』は、家庭での実習とした。また、意見交流を大切にするために、校内研究「伝え合う力の育成」における「学びの4つのステージ」（**考えをもつ**→**表現する**→**解決する**→**決定する**）を、本授業実践でもあてはめて、各時間において意識的に取り入れた。

質疑概要

Q、授業時数の確保が大変だったということだが、どの部分に時間がかかったのか。

A、パンフレットをまとめる際に時間がかかった。朝自習の時間や宿題などを利用してなるべく時数がオーバーしないようにした。

Q、家庭での買い物やみそ汁作りの実践では、様々な家庭の子がいると思われるが、全員が取り組めたのか。

A、みそ汁作りを事前に授業で実習し、その後、全家庭で取り組んでもらった。

Q、買い物の実践は、家でお金をもらって、自分で買い物に行くようにしたのか。

A、自分で買い物に行っても、家族と行ってもどちらでもよいということを家庭に連絡した。家族と一緒に行って、買い物かごを別にして、みそ汁の材料は自分で買ったという子が多かった。

研究協議概要

【「買い物とくらし」の単元における、具体的な活動の扱いや目的意識のもたせ方について】

- 「買い物とくらし」の単元で買い物やみそ汁の実習と結び付けて扱わず、スーパーのちらしなどで、旬の食材や値段などを調べる活動をした。近くに買い物ができるやスーパーや店がある環境も大事である。
- お楽しみ会の買い物や弁当作りの食材の買い物などでも買い物の実習ができる。
- 保護者に呼びかけて、家庭で買い物をするのは、難しいことだが、今回はすべての家庭が取り組みうまく成果が実っていることがよかった。保護者へ依頼することが難しいときは、グループの話し合いで、メンバーの好みの具材を決め、グループで買い物をするという方法もある。買い物の題材が食材であるということは、みんなで考えることができるという点で、良い題材だった。
- 買い物の学習の導入を食べ物にしたのがよかった。チョコレートなど身近なものにしたので、興味が深まったのではないかと。
- みそ汁作りを通して買い物の仕方を学習したことは、家族の大変さ、お金の使い方の学習につながったと思う。
- 家でみそ汁を作る前に、授業でみそ汁作りの学習をしていた。今回の学習のつながりや、目的意識を持たせる上でよかったのではないかと。
- 家庭でのみそ汁の材料の買い物と実習は、生活と密着しているので、目的意識を持たせやすいと思った。家族を巻き込むことで、家族に喜んでもらえ、またやってみようという意欲につながるのではないかと。
- 授業での話し合いが、実際の買い物に生かされている。

- ・今やっている学習が次にどんな学習につながっていくかわかると、意欲につながると思う。2学期のみそ汁作りの実習が、今回の家族のためのみそ汁作り、さらに6年生の「家族のための1食分の食事」につながっていった、繰り返すことで、学習が深まっていくと思う。
- ・『買い物5箇条』には、買い物についての大切なものがたくさん詰まっています、これを書かせたのはよかった。
- ・パンフレット作りは、それぞれの感想や気づきが共有でき、有意義な活動である。
- ・旬の食材や食材の選び方について栄養士さんの話を聞くことも良い学習である。
- ・買い物を経験して、買い物が難しいと感じている子がいたことは、観点をよく考えて買い物をしているからで、ねらいに沿った活動ができていると思う。

【家庭科の授業と家庭生活との連携について】

- ・授業で実習したものは、夏休みの宿題などにしている。家の人にコメントを書いてもらうことにより、モチベーションが上がると思う。
- ・家庭の事情によっては宿題には出しにくい。また、地域によって家庭への呼びかけが難しい場合もある。いろいろな家庭があるので、実態をしっかりと把握する必要がある。
- ・普段からの家庭への連絡が重要である。学習の主旨や目的を知らせることも大事である。
- ・担任は、学級通信などで家庭と連携が取りやすい。専科は、家庭との連絡が取りにくく、家庭の様子がよくわからないので、宿題が出しづらい面がある。家庭科通信をだしたり、学級通信に載せてもらったり、懇談会で話したりして、家庭との連携を図るようにしている。
- ・家庭科の実習と実際の家庭での家事とが、結びつかない場合がある。みそ汁を作らない家庭もある。
- ・『買い物5箇条』の観点の優先順位が、家庭によって違うことに触れておくと、家庭によりいろいろな価値観があることを知ることができる。

まとめ概要

- ・提案は、内容の豊かな取り組みの発表であった。
- ・家庭との連携については、担任として家庭環境を知った上で、取り組みができていた。クラスの実態が難しいときには、取り組みを工夫する必要がある。
- ・専科の場合は、担任との綿密な連絡を取り、子どもたちが取り組みたくなる仕掛けが必要である。学習への興味関心を高める工夫が必要である。
- ・学年で家庭科の実技研修に取り組むなどして、教師もスキルを身につけておくとうい。
- ・生活が便利になるにつれて、生活のスキルが身に付きにくい環境になっている。家庭科は、子どもの五感を使った実習を通して、本物に触れる学習である。家庭に返すことで、くらしに結びついているという実感が持てる。
- ・学習したことを家庭に返すことで、親は、子どもの頑張る姿が見られ、子どもは家族が喜んでくれることで、家族を大切にすることが育っていく。
- ・提案は、家庭科の教育目標「日常生活に必要な基礎的な知識・技能と家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てること」に向き合った題材であった。
- ・家庭科での技能は、子どもから遠いものになりつつある。必要性を持たせて、理解させてできるようにしなければならない。
- ・今回のテーマ『家族の一員として、自ら考え実践できる家庭科を目指して』は、環境によって、学校によって、クラスによって様々な方法が考えられるが、本提案の取り組みは、ねらいにピッタリであった。
- ・「伝え合う力の育成」における4つの学びのステージの手法を家庭科の学習に取り入れて授業を行っていたが、よく考え、よく話し合っていて、交流ができていた。しかも無理にやらされているというところがなくよかった。
- ・課題として、時数の制限があげられる。どう時間を使っていくか、目的に到達しているかの一人ひとりの評価や、一人ひとりどう関わったかが見られるとさらに良かった。